

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 1 日現在

機関番号：34304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720029

研究課題名(和文) 仏教論理学とジャйна教論理学の比較研究：アルチャタとジャйна教徒の対立と相互交渉

研究課題名(英文) A comparative study between Buddhist logic and Jaina logic: Conflicts and interactions between Arcata and Jaina logicians

研究代表者

志賀 浄邦 (SHIGA, Kiyokuni)

京都産業大学・文化学部・准教授

研究者番号：60440872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、仏教論理学者アルチャタとジャйна教論理学者達が存在論をめぐる諸問題に関して「対立」するものの、推理論あるいは遍充論においてはむしろ類似する思想を有しており、両者の間に「相互交渉」があったのではないかという可能性を提示した。両者の「対立」については、アルチャタ著『論証因一滴論注』に紹介されるジャйна教思想とそれに対する批判部分のテキストを読解することを通して、アルチャタが想定していたジャйна教思想がいかなるものであったかを明らかにした。また「相互交渉」に関しては、ジャйна教徒パートルスヴァーミン及びアカランカとアルチャタの見解がいずれも内遍充論的傾向をもつという類似性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：Through this research, I have come to the following conclusion. Although the Buddhist logician, Arcata, and Jaina logicians are in conflict with each other over the problems on ontology, they share similar views regarding the theory of inference and pervasion. This fact suggests that there might be interactions between the two as well. Concerning the conflicts, I clarified the whole picture of the Jaina view and Arcata's criticism of it through editing and translating the relevant texts in his Hetubindutika. Concerning the interactions, I pointed out that both Arcata and Jaina logicians such as Patrasvamin and Akalanka negate the external pervasion (bahirvyapti) and take affirming attitudes to internal pervasion (antarvyapti).

研究分野：印度哲学，仏教論理学

キーワード：仏教論理学 ジャйна教論理学 アルチャタ ダルマキールティ アカランカ 内遍充 推理論 存在論

## 1. 研究開始当初の背景

仏教とジャイナ教という二つの宗教は、成立当初から多くの共通点を有していた。両者の共通点とは例えば、当時のインドにおいて支配的であったバラモン教思想やカースト制度に反対の姿勢を取ったこと、創造主としての神の存在を認めない無神論の立場に立ったこと、あらゆる生命の尊重を謳う不殺生・非暴力主義を掲げたことなどである。また両者は共に、論理的思考や合理性、また何らかの対象を認識する際の客観性や中立性を重んじ、後に高度な認識論・論理学の体系を構築した。両学派の論理性重視の淵源は、仏教の開祖ゴータマ・ブッダの説いた縁起思想や因果論、またジャイナ教の開祖マハーヴィーラの説いた相対論に求めることもできるかもしれない。

7世紀頃、仏教の側ではダルマキールティという人物が登場し、ディグナーガ(5-6世紀)が構築した論理学体系を批判的に継承しつつ数多くの新理論を打ち立てた。その後、多くの注釈者達がダルマキールティの著作に対する注釈書を著す時代が到来する。本研究で取り上げたアルチャタ(8世紀)もダルマキールティの著作の優れた注釈者の一人である。ジャイナ教徒の側では、パートラスヴァーミン(7-8世紀)やアカランカ(8世紀)といった人物が登場し、ディグナーガやダルマキールティの打ち立てた論理学に対抗する形でジャイナ教論理学を大成させた。

従来の研究では、アカランカ以来のジャイナ教の認識論・論理学は、仏教認識論・論理学の思想・理論を全面的に取り入れ、半ば模倣することによって体系化が進んだと言われてきたが、両者には決定的な相違点も数多く見られ、それがジャイナ教独自の教義に基づいている場合も少なくない。例えば、仏教徒は無常観を論理的に支える「あらゆる事物は瞬間的存在である」という刹那滅論を展開するが、ジャイナ教徒はそれを一面的な見方とし、「あらゆる事物は多面的である(=ある点から見れば瞬間的存在であるが、別の点から見れば瞬間的存在ではない)」と主張する。このようにジャイナ教徒は、あるものの見方に対して必ず「ある点から見れば…」という観点を示す言葉を付加しなければならないとする多面的認識、すなわち相対論を展開する。興味深いのは、両者がこれら異なった命題を同型の論理システムで論証しようとしている点である。その論理システムが、いわゆる「内遍充論」(推理対象と論証因の間の必然的關係は、論証の主題の内部において把握されるだけで十分であるという立場)である。

報告者は2006年に京都大学に提出した博士論文『推理論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の論争とその思想的意義の考察』において、『真理綱要』等の文献における引用断片によってのみ知られるジャイナ教徒パート

ラスヴァーミンの思想及び年代について検討し、主に仏教論理学派の視点から、仏教徒とジャイナ教徒の論争の様相とその思想的意義を考究した。また上掲論文第6章においては、両宗教の諸論師の年代及び前後関係に関する仮説(ダルマキールティ パートラスヴァーミン アルチャタ アカランカ)も提示した。

当該分野の研究開始当初の研究状況は、国内・国外共にジャイナ教論理学自体の研究者が極めて少ない他、アルチャタとジャイナ教論理学者との関係を考察した研究もほとんど存在しないという状況であった。7-8世紀はポスト・ダルマキールティの重要な時代であることから、この時代の思想的動向を包括的に解明するためにも、学派間交渉の研究は急務であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、仏教論理学書とジャイナ教論理学書を読解しその内容を比較することによって、両者の共通点と相違点を明らかにすることであった。特に、アルチャタの著作『論証因一滴論注(ヘートウピンドウ・テイカー)』を取り上げ、彼の立場とジャイナ教思想との関係について解明することを目指した。また、博士論文において提示した仮説を出発点として、後代刹那滅論証に欠かせないものとなる「内遍充論」をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の相互交渉の軌跡を文献上で確認することができた。

3年間の研究期間の間に、具体的には以下の3点について取り組んだ。

### (1) パートラスヴァーミンとアルチャタの関係

ジャイナ教徒パートラスヴァーミンは、仏教徒が主張する論証因の三条件を批判し、新たに一条件説を唱えた。そして三条件説と一条件説は、それぞれ外遍充と内遍充に対応すると見なした。一方、アルチャタは三条件説を擁護するものの外遍充を批判しており、内遍充については沈黙している。アルチャタがパートラスヴァーミンを知っていたかどうかについて、またアルチャタの沈黙の意味について考究した。

### (2) ジャイナ教思想に対するアルチャタの立場

ダルマキールティの注釈者の一人アルチャタは、自著『論証因一滴論注』の中でジャイナ教思想を紹介し、批判している。このジャイナ教学説は従来その出典が同定されておらず、同箇所翻訳研究も存在しなかった。またこのジャイナ教学説は、ジャイナ教論理学の大成者とされるアカランカの著作『論理の決定(ニヤーヤヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ)』に対する注釈中にも紹介され、注解及び批判が加えられている。両文献を比較・対照しつつ、このジャイナ教学説の内容と引用元を解明することを試みた。

### (3) アルチャタとアカランカの関係

アカランカの諸著作を校訂したマヘンドラクマール・ジャイン氏によると、アルチャタはアカランカの同時代人であり、アカランカの著作中に彼がアルチャタを批判していることを示唆する表現が見られるという。この点に関して、主にアカランカの著作に対する注釈書を解説することによって、両者の前後関係（アルチャタ アカランカ）を検証した。具体的には、アカランカの注釈書中に見られる「アルチャタに帰せられる見解」を抽出して検討し、アカランカがアルチャタを知っていたかどうかについて精査した。

### 3. 研究の方法

上記三つのテーマ：「パートラスヴァーミンとアルチャタの関係」、「ジャイナ教思想に対するアルチャタの立場」、「アルチャタとアカランカの関係」のそれぞれについて、原典研究と思想研究という二つの側面から研究を進めた。原典研究は、サンスクリット及びチベット訳テキストの校訂及び読解を主な方法とし、思想研究は、ジャイナ教と仏教の各論師の思想・立場を浮き彫りにした上でジャイナ教論理学と仏教論理学の体系を比較することを主な方法とした。

思想研究を行うにあたっては、厳密な文献学的方法論に基づくサンスクリットおよびチベット語テキストの校訂及び読解が不可欠となる。原典研究の対象とした文献は、カマラシーラ著『論理一滴論前主張要約』第2章、シャーンタラクシタ/カマラシーラ著『真理綱要』/『真理綱要注』、「推理の考察」章、アルチャタ著『論証因一滴論注』、アカランカ著『論理の決定』及び『定立の決定(シッディ・ヴィニシュチャヤ)』とそれぞれに対する注釈書等である。

また本研究を進める際、大きな役割を果たしたのは、テキスト間の相互参照や用例検索を可能にする電子テキストであった。仏教論理学関係の文献は電子テキスト化が進み、現在では多くの著作の電子テキストが利用可能であるが、ジャイナ教論理学の文献については、著作の数と量が膨大であることもあり、電子テキスト化はあまり進んでいなかった。この状況を改善すべく、少なくとも本研究で扱う箇所については入力作業を完了した。

### 4. 研究成果

本研究全体として目指したことは、ジャイナ教徒と仏教徒それぞれが保持する認識論・論理学に関する文献を比較・対照することにより、両宗教の論理学体系の共通点と相違点を明らかにすることであった。

また本研究の独創的な点は、仏教論理学者アルチャタとジャイナ教論理学の関係性を明らかにしようとした点である。従来アルチャタはダルマキールティの注釈者であり、また後代の仏教論理学及びチベット論理学に

多大な影響を及ぼしたダルモッタラの師匠にあたるということから、仏教内部における思想的影響関係が研究されることが多かった。しかしながら、アルチャタ自身が明示的にジャイナ教学説を紹介している点や、ジャイナ教徒がアルチャタを主要な対論者の一人と見なしている点からも、アルチャタとジャイナ教徒との間に何らかの相互交渉があった可能性が高い。この相互交渉の様相を考察することによって、ジャイナ教論理学の祖師と目されているパートラスヴァーミンやアカランカとの前後関係がある程度まで明らかとなったと考える。このことにより、インド論理学全体において重要な概念である内遍充論の起源と展開についても新たな視点を導入することができたと考える。

以下に、年度ごとの研究成果を挙げる。

#### (1) 平成24年度

当初の研究計画では、平成24年度の研究課題は「パートラスヴァーミンとアルチャタの関係」を考察することであったが、次年度に取り組む予定であった研究課題「ジャイナ教思想に対するアルチャタの立場」と内容的にも密接に関係するため、予定を変更して両方の課題を同時進行的に進めることとした。当年度に実施した研究の成果については、平成24年9月に大谷大学で開催されたジャイナ教研究会において発表する機会を得た。当発表において報告者は、ジャイナ教の諸論師とアルチャタは存在論をめぐる諸問題に関しては対立するものの、推理論及び遍充論においてはむしろ類似する思想を有しており、両者の間に相互交渉あるいは何らかの影響関係があったのではないかという仮説を提示した。

両者の「対立」については、アルチャタ著『論証因一滴論注』に紹介されるジャイナ教徒の見解とそれを批判する部分のテキストを校訂・翻訳し、アルチャタが想定していたジャイナ教徒の見解について考察した。その上で、その見解がどの時代に属し、どの論師の見解に近いかなどの点について検討した。

「相互交渉」に関しては、ジャイナ教徒パートラスヴァーミンとアルチャタの見解の類似性を指摘した。具体的には、両者が論証因の三条件を満たすにもかかわらず正しい推理とはならない例として同じ推論式（「彼は肌の色が黒い。かの人の子どもであるから」）を挙げており、議論の展開の仕方も類似していることから、アルチャタがパートラスヴァーミンを知っていた可能性が高いという結論に至った。

#### (2) 平成25年度

当年度に予定していた研究課題は、「ジャイナ教思想に対するアルチャタの立場」であったが、原典研究・思想研究いずれに関しても、計画通りに研究を進めることができた。具体的な研究成果は以下の通りである。アルチャタ著『論証因一滴論注』に見られる、ジ

ジャイナ教徒の主張する多面的実在論とその批判部分について、前年度に引き続きテキスト校訂と翻訳を進めた。その過程で、この箇所が、ヴァーディデーヴァスーリ以外のジャイナ教論理学者によっても引用され批判されていることが明らかになった。また上記のジャイナ教学説は、その出典が同定されておらず、同箇所の翻訳研究も存在していなかったが、多面的実在論を主張するこのジャイナ教学説の具体的内容を分析し、ジャイナ教文献との比較を試みた結果、出典をある程度まで確定することができた。さらに、アルチャタ以後に現れる仏教論理学書、例えばシャーンタラクシタ/カマラシーラによる『真理綱要』/『真理綱要注』「アートマンの考察」章やジターリによる『ジャイナ教徒の見解の考察』にも類似する見解を見出すことができた。

当年度に予定していた研究課題「ジャイナ教思想に対するアルチャタの立場」については、前年度のジャイナ教研究会での口頭発表において、すでに先取りする形で取り上げ論じていたため、当年度はそれを厳密に検証し、学術論文の形にすることに専念した。その成果は平成25年10月発行の『ジャイナ教研究』第19号に掲載された。また、平成25年8月に行われた日本印度学仏教学会での発表においては、次年度の研究課題としていた「アルチャタとアカランカの関係」にも取り組むことができ、研究の先鞭をつけることができた。平成25年9月には、インド・アーメダバード(L. D. 研究所とその周辺地域)に出張し、ジャイナ教論理学関連の資料収集や現地の研究者との学術交流を行った。

### (3) 平成26年度

当年度は主に、「アルチャタとアカランカの関係」について、原典研究と思想研究という二つの側面から考察した。まず基礎作業として、アカランカの2つの著作(『論理の決定』及び『定立の決定』)に対する二つの注釈書から、アルチャタという名と共に引用あるいは紹介されるパッセージを網羅的に収集するという作業を行った。その上で、それらのパッセージを『論証因一滴論注』におけるアルチャタ自身の見解と比較・対照した。その結果、二つの著作の注釈書においてアルチャタに帰せられている説は、少なくとも『論証因一滴論注』からのリテラルな引用ではなく、同書に説かれている内容の要約あるいは思想・見解の引用である可能性が高いことが明らかになった。

その他、平成26年8月にドイツ・ハイデルベルクにて行われた国際ダルマキールティ学会において、“On the meaning of bahyartha in Dignaga’s and Jinendrabuddhi’s theories of inference” というタイトルで口頭発表を行った。本発表では、主に仏教論理学における遍充論を扱ったが、一部、外遍充論との関連においてジャイナ教論理学者(パートラスヴァ

ーミン等)の見解についても言及した。また共同研究プロジェクト「インド哲学諸派の<存在>をめぐる議論の解明」(ダルシャナ科研)の一環として平成26年9月に開催された合同研究会では、「仏教における存在と時間：三世実有論を再考する」というタイトルで口頭発表を行った。本発表では、シャーンタラクシタ/カマラシーラによる『真理綱要』/『真理綱要注』「三時の考察」章に説かれる内容に沿って、仏教の存在論・時間論について考究したが、発表の後半部において、説一切有部の三世実有論とインド哲学諸派(主にジャイナ教徒とミーマーンサー学派)の主張する存在論の類似性についても論じた。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計3件)

志賀 浄邦、「仏教における存在と時間：三世実有論をめぐる諸問題を再考する」、『インド哲学仏教学研究』第22巻、査読有、2015、151 - 174

志賀 浄邦、「Arcata’s views introduced in Jaina treatises」、『印度学仏教学研究』第62巻第3号、査読有、2014、1272 - 1279

志賀 浄邦、「Conflicts and interactions between Jaina logicians and Arcata」、『ジャイナ教研究』第19巻、査読有、2013、19 - 68

#### [学会発表](計5件)

志賀 浄邦、「ダルマキールティの考える知覚のメカニズム：心作用(caitta)はいかにして知覚されるか」、『科研費・基盤研究(B)「仏典における認識機序記述の研究 最初期から大乘に至る記述の構造的把握を通して」第5回研究会、2015年2月22日、京都大学(京都府・京都市)

志賀 浄邦、「仏教における存在と時間：三世実有論をめぐる諸問題を再考する」、『科研費・基盤研究(A)「インド哲学諸派における<存在>をめぐる議論の解明」(ダルシャナ科研)2014年度合同研究会、2014年9月13 - 15日、ホテルニューことぶき(長野県・松本市)

志賀 浄邦、「On the meaning of bahyartha in Dignaga’s and Jinendrabuddhi’s theories of inference」、『国際ダルマキールティ学会、2014年8月26 - 30日、ドイツ・ハイデルベルク

志賀 浄邦、「ジャイナ教徒に紹介され

るアルチャタ説』、日本印度学仏教学会、  
2013年8月31日 - 9月1日、島根県民  
会館（島根県・松江市）

志賀 浄邦、「ジャイナ教諸論師とアル  
チャタの対立と相互交渉」、ジャイナ教  
研究会、2012年9月29日、大谷大学（京  
都府・京都市）

〔図書〕（計1件）

志賀 浄邦 他、佼成出版社、『奥田聖應  
先生頌寿記念インド学仏教学論集』、  
2014、1156（425 - 437）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

志賀 浄邦（SHIGA, Kiyokuni）  
京都産業大学・文化学部・准教授  
研究者番号： 60440872